

円滑な幼保小接続のための保育者養成教育内容の検討 : A 市の公立小学校における栄養教諭・栄養士等のアンケート調査のテキストマイニング分析から

著者	長島 万里子, 山下 奈美子, 青柳 徳子
雑誌名	洗足論叢
号	51
ページ	229-240
発行年	2023-03-27
ISSN	2433-9237
URL	http://id.nii.ac.jp/1493/00002681/



円滑な幼保小接続のための保育者養成教育内容の検討

—A市の公立小学校における栄養教諭・栄養士等のアンケート調査の テキストマイニング分析から—

The Study on the content of childcare training education for smooth connection between ECEC and elementary school

— A text mining analysis of a survey of public elementary schools' nutrition teachers in A city —

長島万里子、山下奈美子、青柳徳子

Nagashima Mariko, Yamashita Namiko, Aoyagi Noriko

1 研究背景

1-1 問題の所在

我が国においては2015年に子ども・子育て支援新制度が施行され、保育支援の充実や保育の質の向上が一層強く進められることになった。そして、幼児教育・保育の在り方についての大きな道標である保育所保育指針、幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領が2017年に同時に改訂され、3歳以上児の教育・保育内容の共通化が図られるとともに幼児教育・保育において育みたい子どもの資質・能力、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が示された。また、同時に小中学校における学習指導要領も改訂され、前述の指針・要領等とあわせて就学前教育・保育機関である保育所・認定こども園・幼稚園における教育・保育の指針と就学後の小学校、中学校へと子どもを育てるための目標が一つのつながった道筋であることが示された。幼児期の教育・保育がその後の人生の基盤になる重要な時期であることが国家カリキュラムとして打ち出されことは、幼児教育・保育における大きな節目となったといえよう。文部科学省（2010）は今から10年以上前に「幼児期の教育と児童期の教育は、それぞれの段階における役割と責任を果たすとともに、子どもの発達や学びの連続性を保障するため、両者の教育が円滑に接続し、教育の連続性・一貫性を確保し、子どもに対して体系的な教育が組織的に行われるようにすることは極めて重要である」と幼保小接続の重要性を指摘していた。そこでは幼保小接続のために、教職員は「まず長期的かつ柔軟な視点で幼児期と児童期をつながりとして捉え、その上で発達の段階などに留意しつつ、子どものよさや長所を生かす教育活動を冷静に計画・構成し、使命感や情熱を持って目の前の子どもに集中し教えることが求められる」という記述がみられる。

一方で、世界的にも幼保小接続の重要性が注目されている。経済協力開発機構（OECD）は2001年から2021年までの間に「幼児教育・保育白書（Starting Strong）」を6冊公表しており、「幼児期に受けた質の良い教育・保育がその後の人生を豊かにする（OECD2001）」と提言した「Starting Strong（人生の始まりこそ力強く）」の第一弾が2001年に発表されて以来、その保育に関する調査や提言を踏

まえて世界各国で幼児教育・保育の質を高めるべく改革が行われている。その第6弾(2021)では、幼保小接続の大切さが指摘されている。具体的には、確かな幼保小接続と質の高いECEC(幼児教育・保育)を実現するための鍵について①目標の共有②子どもの発達への包括的なアプローチを含むカリキュラムの連携・接続③異なる教育段階にまたがる調整と連携である、と述べられている(ベルフェアリ2020)。

上述のように、保育者(幼稚園教諭・保育士・保育教諭)が「長期的かつ柔軟な視点で幼児期と児童期をつながりとして捉え、その上で発達の段階などに留意しつつ、子どものよさや長所を生かす教育活動を冷静に計画・構成し、使命感や情熱を持って目の前の子どもに集中し教え導くこと」や「①目標の共有②子どもの発達への包括的なアプローチを含むカリキュラムの連携・接続③異なる教育段階にまたがる調整と連携」を行うことが円滑な幼保小接続のために有効な手段になることが考えられる。

しかしながら、2010年の時点においては、幼保小接続の重要性は理解されているものの「接続関係を具体的にすることが難しい」(52%)、「幼小(幼保小)の教育の違いについて十分理解・意識していない」(34%)、「接続した教育課程の編成に積極的ではない」(23%)などの理由で幼保小接続の取組は十分実施されているとはいえない状況であることが指摘されている(文部科学省2010)。この分野の研究に関しては、「小1プロブレムの解決」をテーマとしたものが多くあり、近年教育内容の接続へと移ってきた経緯がある(国立教育政策研究所2017)。そして優れた幼保小接続の事例の蓄積や、スタートカリキュラムの作成法の研究は進んでいる。しかしながら、国立教育政策研究所(2017)が指摘するように、保育者養成課程段階から接続に対する理解と意識を高める方法については理論と実践をつなぐ研究が不足している状況である。

その後2021年に、幼児教育の質的向上及び小学校との円滑な接続について専門的な調査審議を行うことを目的として文部科学省は中央教育審議会初等中等教育分科会の下に「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」を設置した。そして義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間を「架け橋期」と定義し、「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)」を策定した(文部科学省2022)。また委員会が発表した「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会-審議経過報告-」では、①幼児教育の質に関する社会や小学校等との認識の共有、②0~18歳まで見通した学びの連続性に配慮しつつ、幼保小の接続期の教育の質を確保するための手立ての不足、③格差なく学びや生活の基盤を育む重要性と多様性への配慮、④教育の質を保障するために必要な体制等、⑤教育の機会が十分に確保されていない子供や家庭への支援と、課題が5点に整理された(文部科学省2022)。これらの課題への取組として、「子供を中心として、自治体が現場の先生方とともに理解を深めていくことが大切であり、都道府県・市町村の首長や教育長等には、乳幼児期の教育がその後の教育の基盤であることの認識を共有いただけるよう、理解・協力を求める(審議経過報告p21)」こと、「自治体のリーダーシップのもと、教育に関する専門性の向上を、地域全体で図ることのできる仕組みづくりを推進する(同報告p23)」こと、「教員養成大学や専門学校の学生が、園や小学校でのインターンシップ(体験活動)等の一環として、幼保小の架け橋期の取組に関わり、学びを深めることを促進する」こと(同報告p23)、「幼児教育関係者の研修等において小学校教育を取り上げる一方、小学校関係者の研修等において幼児教育を取り上げるなど、施設類型・学校種を越えて架け橋期の教育の質に関する認識を広めていくため

の工夫を共有する」こと（同報告 p23）などがあげられている。

そこで本研究では、保育者養成課程段階から幼保小接続に対する理解と意識を高める方法を模索することに焦点を当てることとした。具体的には、円滑な幼保小接続のため、保育者にはどのようなことを知識として備えて現場に出ることが求められているのか、そのために保育者養成段階でどのような養成教育を行うことが望ましいのかを、小学校教員対象の質問紙調査から実証的に探ることとした。

研究方法として、研究チームでは小学校における幼保小接続の実態を把握するための小学校教員（①低学年担当教諭、②栄養教諭／栄養士、③養護教諭）対象の質問紙調査を3種類、計画した。小学校における幼保小接続の主な担当者である低学年（1・2年）担当教諭のほかに栄養教諭／栄養士、養護教諭を設定したのは、幼保小接続のポイントの中に給食と、生活習慣に関する内容が含まれるからである（伊藤ほか 2020）。本稿では②栄養教諭／栄養士調査の結果を示す。

小学校における食と生活習慣の専門家である栄養教諭／栄養士、養護教諭の声をすくうことにより、保育者養成段階における教育内容の中により効果的な幼保小接続への理解・意識向上のための工夫を提案することができる考える。

栄養教諭は、2005年に制度が開始された職種である。各学校における指導体制の要として食育の推進において重要な役割を担う（文部科学省 2004）。2006年に政府の食育推進会議において決定された食育推進基本計画では、栄養教諭の配置が進むことにより、各学校において、栄養教諭を中心として食に関する指導に係る全体計画が作成されることや、教諭等により、体系的・継続的な学校全体の取組となることが期待されるとしている。ただし、小学校の現場では栄養士のまま勤務するケースも多く、自治体ごとに小学校における栄養教諭配置率も異なる（文部科学省 2021）ことから本研究においては栄養教諭もしくは栄養士とした。

1-2 先行研究

前述したように保育者養成校の教育内容に言及した先行研究は多くないが、近年、円滑な幼保小接続のための保育養成について論じられることが増えてきている。

保育者養成課程の視点からは、松永ほか（2017）が桜花学園大学保育学部における教育実習の指導の実際と具体的な課題を検討した上で、幼稚園教育要領第1章総則を手掛かりに、①幼稚園での教育実習生と小学校での教育実習生が互いにその教育及び保育の在り方について理解を深めるような機会を用意すること ②幼稚園・小学校の教育実習生が互いの学習指導要領を読むこと ③幼稚園での教育実習生と小学校での教育実習生が、互いの教育理念・実態や子供の様子・成長の在り方などについて意見交換することの3点を提言している。また、伊藤ほか（2020）は保育者に質問紙調査を実施しており、その結果は保育者養成段階でも活用できるものである。加えて、先行研究を整理し、幼保小接続における課題を取り上げたものと、幼保小接続におけるカリキュラムや実践例を取り上げたものが多く、幼保小接続に関する研究会の参加の有無と交流の有無が保育者の接続の考えに与える影響や、幼保小接続の考え方の施設による違いに着目した研究は見当たらなかったとしている。そして論文では小学校との接続に関する研修会の参加の有無と小学校との交流の有無が保育者の幼保小接続の考えに与えた影響、幼保小接

続に関する保育者の意識を明らかにするため質問紙調査を保育者 116 名に対し実施し、結果として施設（幼稚園・保育所・こども園）ごとの研修会参加の差はないこと、小学校との交流は幼稚園が多いこと、どの施設の保育者も、研修会の必要性を感じていることなどを報告している。

保育者養成課程から範囲を広げ、小学校教員養成課程に関する先行研究についても触れておきたい。生活科に関する授業のシラバス分析による研究がいくつか見られる。西川（2021）は、国立大学小学校教員養成課程のうち、2008 年以前のシラバスを web 上に公開している 9 校における、2001～2020 年度の生活科シラバス 1,241 件を分析し、幼保小接続関連キーワードが出現したシラバスの割合を算出している。それによると、学習指導要領改訂の行われた 2008 年及び 2017 年頃に「スタートカリキュラム」「小1 プロブレム」の出現頻度が上がるなどの特徴的な変化が見られ、関連キーワードの該当しないシラバスの割合が減少傾向にあることから、国公立大学小学校教員養成課程での生活科に関する授業において幼児教育や幼保小接続に関連のある内容の教授が行われるようになってきていると述べている。しかし、西川の研究ではどこまで幼児教育の要素を含んで授業が行われているかまでは明らかになっていない。

叶内ほか（2022）は、全国国立大学のうち、小学校教員養成課程を設置している 52 大学を対象とし、2019 年 4 月時点で最新の生活科に関する全 237 件の授業の web シラバスを、各大学の生活科に関する科目の種類別開講数・生活科の授業を担当している教員の主要専門分野・記載されている「幼保小接続に関する記述の有無」とその「内容」を分析している。それによると、あくまでシラバス上であり、実際の授業の中では幼保小接続について触れている可能性を述べた上で、幼保小接続に関する文言がシラバスに反映されているものは 3 割程度に留まっているとしている。よって、大学の生活科に関する授業カリキュラムの中身として必要な要素が十分に反映されているとは言い難く、今後は生活科の授業内容の構成を幼保小接続の視点からも見直す必要があると述べている。また、「教科に関する専門的事項」と「各教科の指導法」の記述内容の詳細についての差異を明らかにしていくことと、新学習指導要領全面実施後のシラバス内の記述内容の変化についての分析を今後の研究課題として述べている。

2 研究目的

以上のように、各先行研究においてはシラバスの分析を中心に研究が進められているものが多く、現場で働く保育者や教員の実際の声データをデータとして用いた研究は少ない。そこで本研究チームでは、小学校教員に対して質問紙調査を行い、そのデータの分析結果を中心に、円滑な幼保小接続に繋げるために望ましい保育者養成課程の在り方について実証的に明らかにしていく。

本研究では小学校の栄養教諭もしくは栄養士が小学校 1 年生の給食指導について、日々現場で感じていることや考えていることを分析し、視覚化する。栄養教諭もしくは栄養士が、小学校の現場においてどのように子どもたちの 0 歳から就学までの食に関する育ちを受け止めているのか、小学校でどのような課題が見受けられるのか、円滑な接続のために幼保側に何が求められているのか、保育者はどのようなことを知識として備えることが望ましいのか、そのために保育者養成段階でどのような養成教育を行うことが望ましいのかを検討していく。

そのために、本研究では円滑な幼保小接続のために保育者がどのようなことを知識として備えて現場に出ることが求められているのか、そのために保育者養成段階でどのような養成教育を行うことが望ましいのか、を実証的に探るため、小学校の栄養教諭もしくは栄養士が幼保小接続に関して感じている以下の2点を明らかにする。

リサーチクエスチョン1：給食の時間やその内容等における、課題にはどのようなものがあるのか。

リサーチクエスチョン2：給食の時間やその内容等における課題を軽減し円滑な幼保小接続を実現するために、保育所や幼稚園でできる工夫にはどのようなものがあるのか。

この2点を、小学校教員の幼保小接続への意識を把握するために作成したアンケート質問項目のうち2点（項目9番、11番）から考察することとした。アンケート項目の詳細については以下の3-1 研究対象と方法に記す。

3 研究方法

3-1 研究対象と方法

本研究では、2022年6月、前述の研究目的のため、首都圏のA市に勤務する小学校栄養教諭もしくは栄養士22名を対象とし、アンケート調査を実施した。A市栄養部会の協力を得て、Googleフォームによるオンライン調査、無記名式にて実施した。回答は自由ということをも明記したが、回答率は100%であった。集計結果は、KH coderによるテキストマイニングの手法にて分析した。

アンケート作成に関しては予備調査として2022年2月、A市の小学校に勤務する栄養教諭4名に対し、電話により、30分程度の半構造化インタビューを行った。その際のインタビュー項目は伊藤ほか(2020)の幼保小接続に関する小学校教員を対象とした質問紙調査項目を使用した。予備調査の対象は全員女性、学校勤務歴は2年から32年であった。その後、研究チームで調整して本調査の項目とした。項目は表1に示す。

表1 小学校栄養教諭 / 学校栄養士の幼保小接続への意識調査 項目一覧

番号	質問項目
1	幼保小接続に関する研修会に参加したことはありますか
2	勤務先では、幼稚園・保育所・こども園との交流はありますか。ある場合、どのような交流ですか。
3	幼保小接続に関する研修は必要だと思いますか。
4	勤務先に幼保小接続のカリキュラムは必要だと思いますか。
5	特に1年生に、幼児期の育ちを意識した声掛けをしていますか。している先生は、具体的に教えてください。
6	小学校教員と幼稚園・保育所・こども園の保育者との交流は必要だと思いますか。その理由も教えてください。
7	小学1年生と年長学年の幼児の交流は必要だと思いますか。交流の具体例を教えてください。
8	幼児期の終わりまでに育って欲しい姿（いわゆる10の姿）をご存じですか
9	給食の時間やその内容等における、課題やいわゆる小1プロブレムとして、どのような経験や、先生方に聞いたお話など、おありですか。
10	給食の時間やその内容等における課題やいわゆる小1プロブレムを防ぐために、送り出した保育所や幼稚園、保護者の側でしてほしいこと、しておいたほうがよいことがあるとしましたら、教えてください。（特に年長の秋以降、いわゆるアプローチ期）
11	給食の時間やその内容等における小1プロブレムの問題を軽減し、円滑な幼保小接続のために、保育所や幼稚園と小学校でできる工夫について、養成段階で触れて置き、保育者として知っておくことはありますか。
12	養成校の授業でできること以外で、円滑な幼保小接続のために保育学生や、実際の保育者にとって有効な手立てがあれば教えてください。
13	給食の時間やその内容等における小1プロブレムの問題を軽減し、円滑な幼保小接続のために、保育所や幼稚園と小学校でできる工夫について、養成段階で触れて置き、保育者として知っておくことはありますか。

3-2 研究における倫理的配慮

本調査の目的を、対象者が集まる場にて、書面を用いて対面にて説明した。アンケートに回答することによって個人が特定されるなどの不利益が生じないこと、プライバシーの保護には最善の注意を払うことをアンケート実施の際に説明し、同意を得たもののみを調査対象とした。分析に際しては、統計的に処理し、個人情報識別ができないように、記載内容は個人情報とひも付けずに管理することを厳守した。また調査の実施にあたっては、洗足こども短期大学研究倫理委員会より承認を受けている（承認番号：洗短倫 2109）。

六

4 分析結果

4-1 記述統計結果

本調査の対象は A 市の小学校栄養教諭もしくは栄養士合計 22 名であった。回答率は 100%、職種の内訳は栄養教諭 12 名 (54.5%)、学校栄養士 10 名 (45.5%) であった。年代は 20 歳代が 5 名 (22.7%)、30 歳代が 1 名 (4.5%)、40 歳代が 9 名 (40.9%)、50 歳代が 6 名 (27.3%)、60 歳代以上が 1 名 (4.5%) であった。勤務年数平均は 2 年から 56 年で、平均 20 年（標準偏差 13.2 年）であった。経歴は 4 年制

大学卒が8名(36.4%)、短期大学卒が8名(36.4%)、その他の経歴が6名(27.3%)であった。その他の経歴は4年制大学もしくは短期大学の卒業後に栄養士資格に関連する短大または専門学校に入学するケース、他業種から転職するケースがあった。

勤務先の小学校の規模は提供食数が500食以下の学校が4名(18.2%)、501食から1000食を提供する学校が11名(50.0%)、1001食以上提供する学校が7名(31.8%)であった。

4-2 リサーチクエストン1：1年生の給食指導における課題の分析結果

アンケートの間9(表1)の項目では、文章の単純集計の結果、39文が確認され、総抽出語数(分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数、樋口2020:29)は572語、助詞・助動詞を除き使用した語数は268語、異なり語数(何種類の語が含まれているかを示す数、樋口2020:29)は192語、使用した語数は134語であった。記述の回答の抽出語を頻出順に整理したものを表2に示す。

表2 「1年生の給食指導における課題」の抽出語頻出順一覧

抽出語	出現回数
食べる	13
給食	10
時間	8
偏食	8
多い	6
座る	5
子	4
児童	4
準備	4
食事	4
遅い	4
指導	3
出る	3
知る	3
歩く	3

頻出語のうち、出現回数が6回を超えている語は「食べる」(13回)「給食」(10回)「時間」(8回)「偏食」(8回)「多い」(6回)であった。最も多い「食べる」についての語の使われ方を原文でみると、「食べる時間が足りずに残業につながる」「前を向いて集中して食べることができない」「偏食だが学校では食べさせてほしいといわれて担任に厳しめに指導され泣いている児童がいた」「食べる速さに個人差がある」「食べ散らかす」などの記述があった。

次に、抽出語の出現頻度と抽出語同士の関連性を要約提示する目的において、共起ネットワーク図の描画を行った。共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語、すなわち抽出語間の共起性の強さを示すものである。抽出した語の頻度をバブル(円)の大きさで表し、語の近さがバブルの近さとなって表されている。また、互いに強く共起している語がグループ化されてサブグラフとして表出される。分析にあたっては、出現数による語の取捨選択に関して最小出現数を2と設定し、描画する共起関係はジャカード係数0.4以上に設定した。得られた結果は図1に示す。

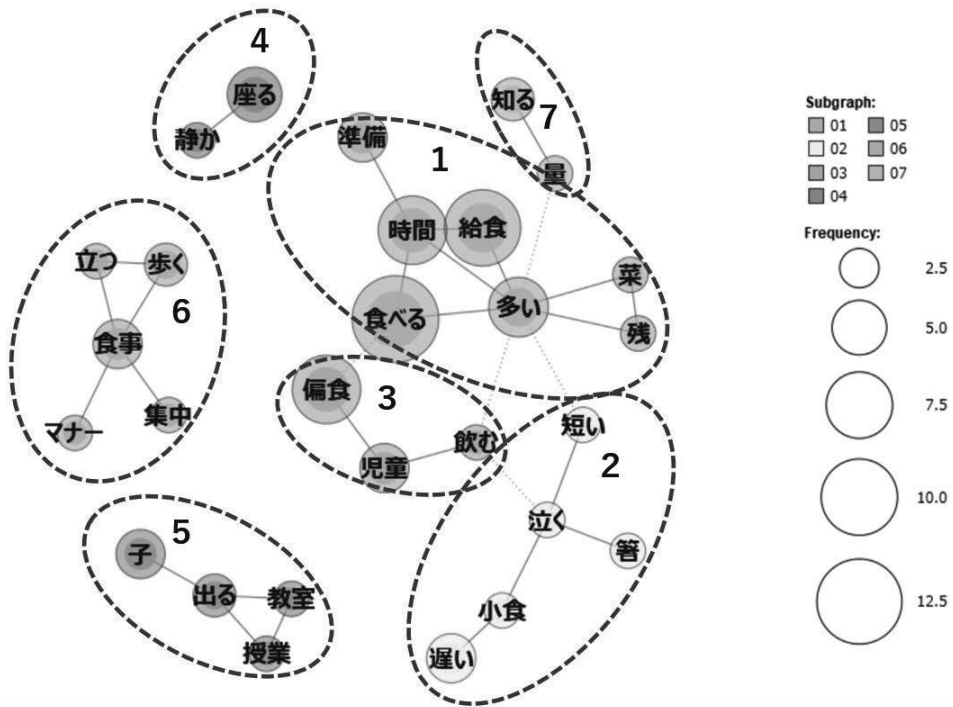


図1 「1年生の給食指導における課題」の回答の共起ネットワーク図

第1サブグラフでは、「食べる－準備－給食－時間－多い－菜－残」の語がみられ、食べる時間、準備に時間がかかること、残菜の多さが浮かび上がってきた。つまり、給食を食べるまでの準備に時間がかかること、残菜が多いことで困っていることが示された。第2サブグラフでは、「遅い－小食－泣く－箸－短い」の語がみられ、小食や、箸使いの問題、食べるのが遅く、短い時間で食べられず泣くことに困っていることが示された。第3サブグラフでは、「偏食－児童－飲む」の語がみられ、偏食や牛乳を飲めない児童に困っていることが示された。第4サブグラフでは、「座る－静か」の語がみられ、静かに座れないことに困っていることが示された。第5サブグラフでは、「授業－教室－出る－子」の語がみられ、授業中に教室を出てしまう子どもに困っていることが示された。第6サブグラフでは、「立つ－歩く－食事－集中－マナー」の語がみられ、食事に立つ、歩く、集中できない、マナーに困っていることが示された。第7サブグラフでは、「量－知る」適切な量を知らないことに困っていることなどが示された。

八

4-3 リサーチクエスト2：給食の時間やその内容等における課題を軽減し円滑な幼保小接続を実現するために、保育所や幼稚園でできる工夫の分析結果

アンケートの間11(表1)の項目では、文章の単純集計の結果、32文が確認され、総抽出語数(分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数、樋口2020:29)は573語、助詞・助動詞を除き使用した語数は253語、異なり語数(何種類の語が含まれているかを示す数、樋口2020:29)は190語、使用した語数は128語であった。記述の回答の抽出語を頻出順に整理したものを表3に示す。

表3 「給食の時間やその内容等における課題軽減し円滑な幼保小接続を実現するために、保育所や幼稚園のできる工夫」の抽出語頻出順一覧

抽出語	出現回数
給食	12
時間	9
思う	8
小学校	6
食べる	5
幼稚園	5
意識	4
マナー	3
共有	3
指導	3
持つ	3
食	3
食事	3
身	3
生活	3
前	3
入学	3
保育	3
保育園	3
練習	3

頻出語のうち、出現回数が6回を超えている語は「給食」(12回)「時間」(9回)「思う」(8回)「小学校」(6回)「食べる」(5回)であった。「給食」についての語の使われ方を原文でみると、「就学前の少しの期間でいいので給食時間を同じにする」「給食や食に関する、保育所や幼稚園での様子、習慣といった情報を共有しておくこと」「給食準備をしっかり行い、給食を食べる時間を十分に設ける必要があるのではないかと思います」「給食前の手洗いなどの衛生面での徹底」「保育園でも小学校に向けて給食時間を意識した声掛けをしたり、牛乳を幼稚園や保育園でも出したりする機会を増やす」などの記述があった。

次に、抽出語の出現頻度と抽出語同士の関連性を要約提示する目的において、共起ネットワーク図の描画を行った。分析にあたっては、出現数による語の取捨選択に関して最小出現数を2と設定し、描画する共起関係はジャカード係数0.4以上に設定した。得られた結果は図2に示す。

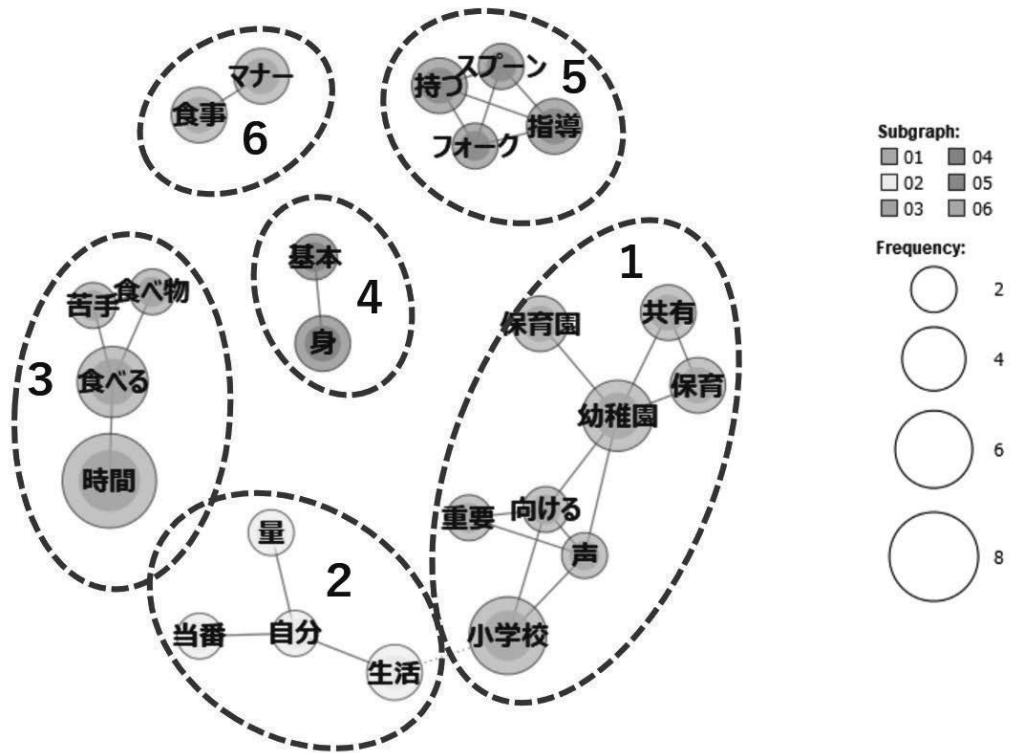


図2 「給食の時間やその内容等における課題を軽減し円滑な幼保小接続を実現するために、保育所や幼稚園でできる工夫」の回答の共起ネットワーク図

第1サブグラフでは、「幼稚園-保育園-保育-小学校-共有-重要-向ける-声」の語がみられ、幼稚園や保育園（所）と情報を共有すること、小学校の給食に向けての声掛けをすることの重要性が示された。第2サブグラフでは、「自分-量-当番-生活」の語がみられ、当番活動や自分の食べる量など、小学校生活を意識してほしいことが示された。第3サブグラフでは、「時間-食べる-苦手-食べ物」の語がみられ、時間を区切って食べる、時間内に食べる、苦手な物を食べることが示された。第4サブグラフでは、基本を身に着けること、第5サブグラフでは、スプーン、フォークの持ち方を指導してほしいこと、第6サブグラフでは、食事マナーを教えて欲しいことが示された。

5 考察と今後の課題

テキストマイニング分析の結果から考察を加えたい。リサーチクエスション1については、栄養教諭もしくは栄養士からみて1年生の給食指導において困ることは①適切な食事量を知らず給食の量や内容に苦手意識があること、②給食準備がスムーズでないこと、③食べるスピード、小食、箸の使い方に問題があったり、それらにより泣いたりするなどの児童がいること、④牛乳が飲めない児童や、偏食の児童の多さ、⑤静かに座ることができない、食事中に立つ、歩く、集中できない、など食事のマナー不足であること、と大きく5点に整理された。

リサーチクエスチョン2については、栄養教諭もしくは栄養士からみて給食の時間やその内容等における小1プロブレムの問題を軽減し円滑な幼保小接続を実現するために、保育所や幼稚園でできる工夫について、①幼稚園、保育所と食に関する情報を共有すること、小学校の給食に向けて声掛けをすること、②給食当番活動や給食の時間、食べる量など、小学校生活を意識してほしいこと、③苦手な食べ物にもチャレンジするようにすること、④スプーン、フォークの持ち方などの食事の基本的なマナーを身に着けるようにすること、と大きく4点に整理された。

本研究においてはアンケート項目の9番と11番を分析することによってリサーチクエスチョンの2点を明らかにすることを試みた。リサーチクエスチョン1に関しては、個々の記述を確認すると必ずしも全ての栄養教諭もしくは栄養士が幼保小接続を重要視しているわけではなかったが、共通した認識として、食に関する幼保小接続期の課題としては食分量、給食準備、食事のスピード、偏食、食事マナーなどがあげられることが明らかになった。

リサーチクエスチョン2については幼保小の情報共有、給食当番活動などを意識すること、偏食の改善、食事マナーなど具体的に取り組むことが可能な項目が浮かび上がってきた。

その他にも食に関して保育学生の心持ち、例えば食事を楽しむことや、食事内容が就学し、成長していくことを喜ぶような声掛けをすることなど、保育者養成校の教育内容として、触れておきたい点が自由記述結果から示唆された。

以上のテキストマイニング結果を踏まえ、幼保小接続を意識した保育者養成のために、養成校が工夫できる教育内容に以下の点が考えられる。

- 1：小学校1年生の給食の量や内容、準備の実際を写真や動画、小学校のホームページなどで伝え、幼稚園や保育所、認定こども園の年長児の食事のそれとの違いについて確認する。
- 2：給食を想定した当番活動の練習など、幼稚園や保育所、認定こども園において給食を意識した声掛け、時間設定をすることの重要性について伝える。
- 3：食事の基本的なマナーや苦手な食材への挑戦については、小学校の給食を見据えて年長の学年では保護者にそれらへの取組を促すことの重要性について伝える。

以上の3点を保育者養成校の「子どもの食と栄養」や、「保育内容・健康」における授業内容に加えることによって、食に関する円滑な幼保小接続がすすむことが考えられるのではないだろうか。そのことによって、幼保小の架け橋期の取組に関わり、学びを深めることが促進されるのではないだろうか。そして、保育学生が保育者となって現場に立つ際に、幼保が0歳から育ててきた子どもの食に関する育ちを大切に、円滑に小学校へとつなげることができる可能性が高まるのではないかと考える。

ほかにも、自治体ごとに、保育学生も参加可能な食の幼保小接続に関わる取組み、小学校給食の様子のホームページ公開があることなど、保育学生にとって小学校給食や、小学校給食を担う栄養教諭の思いを知る手段が示された。

本研究では幼保小接続に関する「食」における課題や、幼保小接続に対する小学校側の栄養教諭/栄養教師の思いを、一部明らかにすることができた。しかしながら、A市という1都市における調査のみにとどまる。今後、調査対象を広げ、より妥当性・信頼性のある調査を実施していきたい。

参考文献一覧

- 伊藤哲章・沼田春香・宗像佑華・柴田卓 (2020) 「保幼保小接続に関する研修・交流の実態及び保育者の意識」『郡山女子大学紀要』。
- 叶内茜・永瀬祐美子・君塚仁美・倉持清美 (2022) 「円滑な保幼小接続をめざす初等教育教員養成の在り方—生活科に関するシラバス分析から」『児童学研究』第46号。
- 国立教育政策研究所 (2017) 幼保小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究報告書
https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-5-1_a.pdf (2022年8月26日確認)
- 西川由佳 (2021) 「幼児教育と幼小接続の観点からみる小学校教員養成課程の生活科シラバスにおける特徴」『お茶の水女子大学子ども学研究紀要』第9号。
- 樋口耕一 2020 「KH Coder 3 リファレンス・マニュアル」
file:///C:/kncoder3/kncoder_manual.pdf (2022年8月26日確認)
- ベルファリゆり (2020) 「世界の幼児教育・保育政策の潮流と本調査の視点」(令和2年2月20日資料：国立教育政策研究所)
https://www.nier.go.jp/youji_kyousei_kenkyuu_center/symposium/sympo_r01/pdf/20200220_Belfali-0402_jpn.pdf (2022年8月26日確認)
- 松永康史・森川拓也・田端智美・上村晶・北島信子・辻岡和代 (2017) 「幼小接続を見据えた教員養成の在り方に関する研究—幼稚園教諭及び小学校教諭免許取得を目指した教育実習指導の課題と展望—」『桜花学園大学保育学部研究紀要』第16号。
- 文部科学省 (2022) 「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き (初版)」
- 文部科学省 (2022) 「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会—審議経過報告—」
- 文部科学省 (2021) 栄養教諭の配置状況 (令和3年5月1日現在)
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/08040314.htm (2022年11月11日確認)
- 文部科学省 (2010) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」の報告書
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/070/houkoku/1298925.htm (2022年8月26日確認)
- 文部科学省 (2004) 「食に関する指導体制の整備について (答申)」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/04011502.htm (2022年8月26日確認)
- OECD (2001) Starting Strong Early Childhood Education and Care
https://read.oecd-ilibrary.org/education/starting-strong_9789264192829-en#page3 (2021年8月1日参照)